

ポスト近代化の時代における北九州市の新たな成長可能性の検討

—北九州市の資源と市民の「寛容性」に着目して—

氏名 平島 弘章

指導教員 王 効平

要旨

本研究では、かつて国策事業で栄え、日本の近代化を支えた北九州市（北九州地域）が、ポスト近代化の時代になると、その産業構造の転換の遅れによって経済停滞、人口減少などの問題を抱える課題先進都市となってしまったことを背景に、そこから脱却するための新たな経済成長の可能性を、固有の資源を分析することによって検討した。具体的には、まず、Jacobs、Sassen、Florida らの先行研究の整理を通し、特にポスト近代化の時代における都市の経済発展モデルの分析と、そこに必要な要素を抽出した。既に北九州市を対象に Florida の 3Ts を用いて分析していた角・吉村・尹の研究については、妥当性を検討した上で、重要な要素として「寛容性」に注目し、現在の市民の実態を把握する必要があると判断した。導き出した都市の発展に必要な要素と先行研究における課題を基に仮説を立て、北九州市の固有資源の分析と市民の「寛容性」の有無を把握するためのアンケート調査の実施を通じて、新たな成長の可能性の検討と提言を試みた。

まず、先行の都市研究の整理から、経済成長及びイノベーションの源泉として「クリエイティビティ」に焦点を当て、その土台となる固有の資源を、歴史的背景と現在の北九州市が置かれている状況を分析することによって明らかにした。さらに、Florida が提唱する 3Ts のうち、先行研究では歴史的文脈から定性的にしか判断されていなかった「寛容性」に着目し、「北九州市民は保守的である」という仮説のもと、北九州市民に対するアンケート調査とその分析を行い、定量的にその「寛容性」を把握した。最後に、得られた分析結果を基に、北九州市の新たな成長に向けた、産業構造・行政・市民意識におけるそれぞれの課題解決策の提言を行った。

北九州市における「寛容性」を、新たな枠組みに捉えなおして定量化を試みたことは、これまでになかったユニークなアプローチといえ、今後の実態に沿った様々なレベルでの課題解決策、特に開発戦略の検討に価値を有するものと確信している。

キーワード：北九州市、ポスト近代化、市民性、寛容性、多様性